

▶ セッション「危機とアーカイブズ」のねらい

高山 正也
国立公文書館

かつて江戸の商家では火災に際して掛売りの記録である大福帳を井戸に沈めてから避難し、鎮火後にそれを引き揚げて債権を回収し、事業の継続を図ったという。危機に際しての組織の維持・復興への寄与・貢献はアーカイブズの存在意義の一つである。時として、アーカイブズ自体やその保有組織の存在自体が危機に瀕し、その結果、貴重な資料類が失われた事例は枚挙に暇がない。

現在のアーキビストの管理下にあるアーカイブズの総量は絶対量としては相当多量ではあっても、本来保存され、現在に伝承されるべき資料の量に比すれば極めて微小であるとも言える。なぜなら、相当量の資料が、風水害・地震・火災といった災害により、また戦争・革命や政治的経済的変動といった社会変動により、さらには無知や犯罪や不注意等によっても失われたからである。このように保存されるべき資料類が散逸・消滅するのは、自然災害という原因に加え、人為的な原因もある。したがって、アーカイブズに関わる我々は自然的、人為的両面での防災に加え、一度災害が発生した場合にその被害を最小限に食い止めるとともに、被害にあったアーカイブズ類の修復・復元にも力を尽くさなければならない。

このような今日的にも重要な課題にアーキビストとしてどう立ち向かうか。放置すれば崩壊しやすいアーカイブズをどう維持するかが今日のアーキビストに問われている。そこで、本稿では、日本における資料の散逸・消滅の危機に際し、如何にアーカイブズ類が保護され、再生されたかの事例を報告し、皆様の参考に供することを目的とする。

そこで、経済的・社会的変動による資料散逸の危機への対応事例として、東京大学経済学部の伊藤正直教授から倒産した証券会社資料の保存について、また産業として衰退・消滅寸前にまで至った石炭産業資料類の保存事例を慶応義塾大学経済学部の杉山伸也教授からご紹介いただく。次いで、災害発生時の復旧も視野に入れ、重要な現用文書の管理を如何に行うかを原子力産業での事例を中心に、日本の代表的レコード・マネジメントサービス企業である日本レコード・マネジメント株式会社の山下貞磨社長から紹介していただく。最後に第二次大戦時に侵攻した米軍により、現地に残された資料類が破壊され尽くし、これを廃墟の中から復興した沖縄県公文書館の資料の回復・復旧事例を、同館の仲本和彦氏よりご紹介いただく。

以上のような、経済・社会変動、自然災害、戦争・国際紛争などによる資料の散逸・消滅の危機にアーカイブズが如何に対応し、被害を予防し、不幸にして被害を受けた際には復元させるかについての経験事例は、国内外のアーカイブズにとって貴重な参考になるものと確信する。

アーカイブズ類の経年劣化の防止策のみならず、資料保存のための種々の危機管理対策の一端をこれらの事例からも汲取ってほしい。